

# 質高い医療へ対話重ね



医療だけでなく医学研究も

行う国立病院機構新潟病院（柏崎市赤坂町）が、研究成果を地域に伝える取り組みに力を入れている。6月には記者会見やイベントを相次いで開き、同病院の医師が開発した医療機器などを披露した。その中には、障害者総合支援法に基づく日常生活用具として地元・柏崎市の給付対象になったものもある。新潟病院は地域においてどのような存在であろうとしているのか。中島孝院長（65）に聞いた。

## 地域での存在意義

「人間は死の寸前まで成長、発達している。重篤な障害のある子どもでも、認知症の高齢者でも成長、発達は衰えることがない。それぞれに役割があり、人生の楽しみ方がある。そういう考え方で、温かく、質の高い医療を提供するという思いを込めている」

― 具体的にはどのような医療を提供していますか。

「身体や脳に障害がある子どもの患者に対して本人に合ったリハビリをする。難病の患者には心臓や呼吸器など一つ一つの機能に必要なケアを行う質の高い医療を提供する。認知症の患者には早期に正確な診断を行い、患者本人や家族に適切な対応法をアドバイスする」

「重篤な障害があり、希望を失いがちな患者でも、これらの治療によって症状が改善したり、悪化を抑えられたりしている」

― 診療だけでなく研究にも力を入れています。

「病院を併設して医学研究をする機関は大学と国立病院機構ぐらいいかない。そのうち国立病院では、医療従事者が目の前の難病患者らに起きている問題から見いだした、現場に密着したテーマの研究を行っている」

― 中島院長自身はどのような研究に取り組んでいますか。

「神経疾患で歩行障害などがある患者のリハビリの難しさは機能回復する原理、方法が確立していないことだ。新潟病院では、私が中心になって（パワーアシストスーツの）『HAL医療用下肢タイプ』に歩行機能を改善する効果があるかを検証する治験を行い、神経筋8疾患においての有効性、安全性が示された」

「国はこのデータを基にH

## 重篤障害患者にも希望

### ■現場に密着

「現場に密着して、患者の苦しみや悩みに寄り添うことが、質の高い医療を提供する鍵だと思います。」

## 診療の道筋 明確に示す

国立病院機構新潟病院 1939年に傷痍（しやうい）軍人新潟療養所として発足し、戦後は国の結核医療機関としての役割を担った。その後、小児慢性疾患の地方基幹施設と位置付けられ、歴史ある呼吸器疾患や神経難病医療などの分野でも専門的医療に当たっている。国立病院・療養所の独立行政法人化に伴い、2004年に現在の名称となった。診療科は脳神経内科、小児科など計11科。上信越地域（新潟、長野、群馬県）で進行性筋萎縮症（筋ジストロフィー）を専門的に治療する唯一の病院でもある。入院病床は350床。

ALを医療機器として承認し、保険適用とした。これによって、HALは全国に普及している」

「新型コロナウイルスが感染症法上の5類に移行したことをきっかけに、もっと地域社会の人とコミュニケーションし、診療内容、研究内容についてアドバイスを受けたいと考えた。それにより診療、研究の質が高まり、ニーズにマッチしたものになっている」

### ■地元理解を

「国立といえながら、私たちは独立採算制で、地域社会に支えられている部分がある。地元市民、県民に病院の取り組みを理解してもらい、この地域で新潟病院に存在意義を認めたい」

― 今後、どう取り組んでいきますか。

「新潟病院で何をどう診療するのかというクリニカルパスを明確に出すべきだと思っている。例えば、パーキンソン病ならどういった診療をすれば最高のケアができるのかなど、その道筋を市民、県民に分かるような形で出していきたい」

「その上で、それを最高のレベルで、優しく、効率良く提供できるように道筋をつくる。初期の認知症患者や障害のある子ども、難病患者が新潟病院に行けば正確な診断や治療を受けられる。そういう価値を分かってもらえるといい」



なかじま・たかし 1958年、新潟市生まれ。新潟大学大学院卒。国立療養所厚潟病院神経内科医長、国立病院機構新潟病院副院長などを経て、2017年4月から現職。専門は脳神経内科学。医療用ロボットスーツを用いた新たな治療の実用化に向けた研究などに取り組んできた。

国立病院機構新潟病院院長

中島 孝さん (65)

(随時掲載)